

そばにいる人。

海外ドラマのひとつコマに、亡くなった部下を偲ぶスピーチのシーンがありました。「彼は私にとって重要な存在だった。亡くなって改めて気づいた」と、集まった同僚たちに語りかけていました。

一方、日本の情報番組で有名人のお葬式が取り上げられると、こんなお別れの言葉が流れます。

「〇〇さん、あのときは楽しかったですね。お世話

になりました。ありがとうございます」と、当然ながら話しかけるスタイルです。

◇
こんな日本の風習についてある外国人タレントさんは「最初は驚きました。まだ聞こえているというか、生きていたときと同じように話しかけるのですから。でも今はあたたかくて良いスタンスだと感じています」と語りました。

日本人にとって、亡き人は

生きているときと、変わらない距離にいます。これは弔辞に限ったことではありません。

お仏壇に手を合わせて「行ってきます」と挨拶あいさつすること、お墓参りのときに「合格しました」などと報告すること、お盆にはご先祖さまが帰ってくるという伝え…。

日本人にとって当たり前の感覚ですが、亡き人はやはり生きています。

このような感じかたや風習は仏教ではなく日本人の感覚によるもので、換言すれば日本の文化です。

◇
今日送ったあの方だって、これから先も、私たちのすぐそばにいてくれます。これまでと変わらず、一人前のお膳を用意したご家族もいらっしやることと思います。
さあ、一緒に食事を続けましょう。

